

【不在対象をめぐる】 (1964)

Edna O'Shaughnessy

この論文の主題は、不在にしてかつ心の支えとなってくれる対象 the absent sustaining object であります。それはまず最初、赤ん坊にとっては「不在のオッパイ the absent breast」というかたちで現れます。この「不在のオッパイ」こそが母子の授乳関係において本質的で重要不可欠な部分と考えられます。つまり、人は誰かと一緒である時もあればまた別々に互いに離れている時もあるわけで、その意味で‘不在’なるものはそれ自体あらゆる人と人との関係性の論理的にいても本質であるからです。誕生以前の胎児は、母親とは恒常的に一体であるわけですが、母親もしくはオッパイやらそのいかなる部分とも関係性を持っているとは言えませんでしょう。誕生時にはじめて子どもは関係性へと踏み出してゆくのです。さらに、関係性とは、相手が離れてしまえばそれで結びつきが消えてしまうといったものとは明らかに違います。授乳されている赤子は、オッパイとのその授乳されているという結びつきだけにあるわけではありません。つまり‘用があるとかないとか’、そうした意味合いではないのです。すなわち‘関係性’を生きているのであります、それが目の前にアルときも或いはイナイ(不在)ときもであります。つまりは、物理的にそこにアルところのオッパイを超えて、イナイ(不在)オッパイであっても、それらのいずれにも関わり合って、その関係性は持続されてゆくものといえましょう

ここで興味を覚えますことは、イナイ(不在)対象は、目の前にアル対象とはその‘性格 character’がまるで逆だということです。目の前にアル対象は、一応のところ良き対象となります。どのような厄介さを伴うにしろ、授乳してくれるオッパイはひとまずいのちを繋いでくれるものだからです。これに反して、不在のオッパイはまずは飢えにおいて感じられるわけで、つまりは必要とされるとき、それはそこにイナイというわけであります。すなわち「不在のオッパイ」とは赤ん坊を飢えて死にそうな目に遭わせるところの‘悪い対象 bad objects’なのです。そうであるとしても、「不在対象 absent object」は、子どもの生にとって必須の、なくてはならないものといえます。そして成長するにつれ、子どもはそれと折り合うことが出来なくてはなりません。それは、良き内的対象 the good internal object を自ら心の内に培う過程で、かなり深刻なつまずきのもとになりかねないのであります。その不在がゆえに憎悪が対象へ向けられるからです。そして、それがアルときに得られた良きもの the good が心の内で保持されることがむずかしくなるからです。しかしながら、それは子どもが育ってゆく上でつまずきになるとは限りません。むしろ不在対象は成長への大いなる刺戟剤 spur となるのです。それは、その苛酷さゆえに子どもに現実というものに否応もなく強いますし、子どもが己れのひ弱さや依存性を思い知ることから身を護らんとしがみついた空想のたぐいをすっかり崩しにいたします。それは子どもに現実を知らしめるのであります。

殊に、「不在対象」とは、思考の発達においてまったくの‘刺激剤’であります。それは偶然そうなるということではありません。なぜなら思考 thought と不在 absence とは論理的な繋がりがあるので。ここであなたは、<目の前にない何かを想像して見てください(think of)>と言われたと試してみてください。例えば画廊にある絵でもいいでしょう。でも、もしもその絵が今現在目の前にあるとしたら、それ

について想像して見てくださいと言われることはありませんでしょう。知覚 perception が思考 thought を閉じてしまうのです。つまりは、こんなふうに基本的で簡単なことです。あなたは何ごとかを、それが目の前にあっても無くても結構ですが、何かしら考えにとりかかる 'think about'、つまり熟考するということですが、それはできますでしょう。が、その前に何ごとかを想像する 'think of' の能力が前提として要るでしょう。これこそが、不在なる物ごとに本質的に関わりを持っているのです。発達的に申しますと、不在のオツパイ the absent breast ということになります。

精神分析的理論は、フラストレーションというものが常に心的発達へと導くということを唱導してまいりました。フロイトは、'人生の或る急迫した事態' に触れ、それがゆえに心の機能が促され、さらなる発達へと弾みがつくことがあると述べております。さらに引き続き、<この人生の急迫した事態に直面するのは、主に身体的ニーズであります> (1900)と、彼は述べております。フロイト自身は、心的発達の条件なるものについては多くを語っておりません。基本的に彼の関心が発達というよりむしろ退行にあったからです。そしてフロイト以降も、フラストレーションが心的機能においてどのような役割を果たすのかについて人々の間に見解の一致があるとはいえません。ここでの核心的な問いは、<赤ん坊はフラストレーションをどのように '経験 experience' しているのか>ということでしょう。赤ん坊がまずは何よりも '身体的ニーズ' を抱えているとして、その子の心的状態 state of mind というのはいかなるものなのでしょう。言い換えれば、赤ん坊がまずは何よりも '身体的ニーズ' を抱えているとき、その子の心の中にはどのような空想 (phantasy) が占められているかということでもあります。

W. R. ビオンの著書『Learning from Experience』において、彼はこうした赤ん坊のニーズの経験について吟味検討しております。そして彼の見解として次のように述べられています。乳児が飢え、オツパイを欲しがっているとき、その子はニーズが満たされていないことに気付かされるのです。このフラストレーション、飢えの苦痛、それこそがその子にとってアルだけであり、そしてそれは最初のところ、悪いオツパイがアルと感じられるのです。ここで乳児は、進歩の重大なる始まりの第一歩を迎えたこととなります。ここで躍起になって求められるオツパイとは、実際のところ、そこにアルところの悪いオツパイではありません、ただ必要とされる時に不在な(イナイ)良いオツパイなわけです。乳児はやがて時を経るにつれ、内的現実すなわち己れのニーズというもの、そして外的現実すなわち 'イナクナツタ良いオツパイ the missing breast' というそれらいずれについても、その事実を知るに至ります。すなわち、子どもは必要とされている不在のオツパイを目の前にアル悪いオツパイという空想において経験するわけですが、それからほんとうのイナクナツタ良いオツパイを想像する think of ことができるようにならねばなりません。子どもの発達にとって重要な鍵となるこうした前進にはつらいものがあります。なぜなら、悪いオツパイとは空想上紛れもなくアルのですし、それは本質的に子どもを飢え死にさせるものと感じられるというわけですから。そしてそうしたフラストレーションの苦痛やら恐れに耐えられるようになって始めて、それらについて思いめぐらすことができ、徐々にここで自分が必要としているのは 'イナクナツタ良いオツパイ' なのだということが考えられるようになります。そうした良いオツパイについて知ること knowledge つまりはそれを思い浮かべること thought が己れのニーズに耐えられるようにも自らを支えるものと思われれます。

フラストレーションへの耐性は、思考が発達する上で不可欠であります。フラストレーションに直面することを避け、空想において単にそれらを排除せんとする子どもは、思考 thinking とは相反する手法を積極的に援用していることとなります。そこで彼の心的力 mental powers は、せいぜい抑制されるか、ないしは頓挫してしまうことになりましょう。こうしたことから、不在対象は子どもに、思考 thought を通じて現実というものを知るべく最初の機会を与え、それからまた、フラストレーションがより耐えられるものとなるような動機づけをもたらすといつてよからうかと思うのです。

セラピイの治療を受ける子どもは、セラピストが目の前に居たり居なくなったりということが順番に繰り返されますから、自ずと早期の対象が現れたり消えたりといったことを再体験することとなります。セラピイは、この観点からして子どもの生の繰り返しとなりましょう。そして、子どもがその対象が現れたり消えたりするときにどんな感情を懐くのをわれわれは克明に観察できるわけなのです。セラピイ開始のごく初めから、子どもはセッションがナイこと(お休み/break)にととても敏感に反応することが観察されます。それが治療経過でからだに馴染んだりリズムを壊すからであります。復活祭の休み、夏休み、そしてクリスマスの休みといったところですが、それからさらには、初回から子どもはセッションの終わりの時間にととても敏感であります。週に何回かセラピイに訪れる子どもの場合ですと、週末にそうした反応がいつそう露わなものとなります。治療の始まりからして、セラピストのイル(存在)・イナイ(不在)は、その根底において「良いもの・悪いもの」と同義語なものとして見做され、体験されるのであります。それつまりは、かつて乳児の折に子どもがオッパイについて懐いた感情が、オッパイが目前にあるときには(一見したところ)良きものとして、そして不在のオッパイは(一見したところ)悪いものとしてですが、「今・ここ」というセラピイの場において反復的に繰り返されるというわけなのです。

さらには、子どもが不在のオッパイにどう対処するかということが思考力の発達の決め手となるといったDr. ビオンの見解に従いますなら、子どもがセラピイのセッションとセッションとの間の空隙 gaps にどう対処するかということ、それが結果的にセラピイの成功の鍵を握る決め手になるといえましょう。そこで、ここで改めて問となりますことは、セラピストの不在という心的重圧を受けながらも、こどもはセラピストと一緒にイルとき(presence)に得られた洞察(すなわち思考 the thoughts)をはたして維持し得るものか、そして尚も活用し続けられるかどうかということになりましょう。

対象が‘現れたり・消えてしまったり comings and goings’の中で対象の‘良い・悪い good and bad’がぶれて変動するよう感じられ、不在がもたらす苦痛に我慢し、それがより耐えられよう考えるということがとても難しくなるということは、普段よりも長い期間セッションがお休みを迎える頃、臨床の実際においてよく見受けられる現象であり珍しくはないのですが、実にこうしたことを説明してるといえましょう。強力な防衛が、セラピストとの近づく‘分離 separation’をめぐる子どもの熾烈な感情を断固拒むのです。同時に、子どもの中にニーズが、そして恐怖やら憎悪もいつそう募りますから、さらなる防衛が躍りだし、感情が強烈であればあるほど、対処しきれないほどになり、子どもは不安定になりがちです。そしてかなり深刻な問題を抱えているケースですと、子どもは来たるべき分離をまるで認めること

ができませんから、認めまいとするあまりそうした気付きをますます‘分離排除 split-off’してしまうため、ますますその子のパーソナリティは先細り、不毛さを募らせてゆくといったことになりましょう。子どもが不在対象についてどのような原初的な空想を懐くのかについては一般的にはよく知られております。その空想において、対象はいろんなふうに攻撃されるのであります。まずは一緒に居てくれないとやら、自分のことばかりにかまけている、もしくは他の誰かと一緒に愉しんでいるといったことを恨みとして、対象の中にある敵意、無視の態度、そして自分勝手さを詰っているわけであります。しかしながら、そうした恨みや嫉妬といった複雑な感情よりも、より基本的にそこに窺われるのは、不在のオツパイが子どもを死に晒したまま放置しているといったことです。ここで或る幼い男の子が言っていることに耳を傾けてみましょう。彼は復活祭のお休みが近づき、セッションの中で‘悪辣非道な不在対象’となった私に対し恐怖を覚えています。そして恐がる自分に大丈夫だって言い聞かせようとしているのです。自分に向かって彼は言います。＜あのね、あのひとは何か言おうとしてるでしょ。大丈夫だって。救われるからって。ちゃんと飲み物をくれるって。ぼくが死んでしまうのをちっとも喜んでなんかいないから・・・＞と。死の恐怖 the fear of dying が治療の中で現れたのであります。それは、対象の不在によって惹起された不安感からなのです。

さてここで、不在対象がもたらす衝撃に耐えられないといった子どもの臨床像をご紹介します。その子の中にあつた、赤ん坊とオツパイとは一つだという防衛的空想が崩れ、それらは別々なんだという現実と直面したのです。そこで、不在対象はすなわち死の脅威と化し、ですからあつという間に一勿論空想上ではありますが一木っ端微塵に吹き飛ばされてしまったというわけです。セッションの経過のなかで、その詳細は後に述べますが、子どもがいかにかこうした事態を投げ出さず、敢えて踏みとどまろうとしたかが覗われます。つまり、彼は事態に直面し始めるのです。彼は必死になってそれについて考え始めるわけです。不在対象に向けて攻撃せずにはいられないということにもなり、また同時に彼は自分自身がたった一人(孤独/aloneness)なんだということにも気づき始めるわけであります。

ここでご紹介するのは、ジョンという12歳になる男児の症例ですが、治療開始して初めてお休み break が伝えられたすぐ後のセッションであります。この復活祭の休暇の5週間前に治療は開始され、彼は週4回通っております。初回のセッションから彼は遊戯室で怯えたふうでありました。部屋の中に立ち尽くし、周囲を不安げな面持ちで見渡し、家具類やら壁やら、またそこに置いてある物と物との間の空隙をただ不安げにぼんやりと眺めておりました。彼は身動きが出来ません。折々に彼はまたとても悲しげな表情を浮かべます。3回目のセッションになって初めてどうにか彼は空いている引き出しに近寄り、それもちょっと好奇心に突き動かされたふうでありました。引き出しの前に壁を作るようにして、彼は自分のコート、鞆、そして手袋をテーブルの上に置きます。それから膝を床について、壁沿いに這ってゆき、引き出しの脇でしゃがんで、何か物を手の先でいじっておりました。それからまた這って戻り、部屋の中をじっと眺め回します。ここでの印象は、引き出しへ近づくためには何かへ這って入り込まねばならないといったふうでした。この印象の正しかったことはその2日後に確認されました。なんと入室時に文字通り彼は靴を脱いだのであります。そしてその靴を入り口のドアのところに置いて遊戯室に入り

ました。空想では彼自身の内から出て、新しい場所に踏み入れたといった感じで、それも何やら霏がかかった、見通しの付かないところのようであります。なぜなら、それは内部 interior であり、つまりは対象の内部というわけです。すなわち彼はそこに隠されている内容物 contents を掴み取るために忍び込んだというわけであります。翌日、彼は部屋の中で急性の閉所恐怖症的発作を呈しました。泣き叫び、もがき、まるで対象の中に監禁されて苦しんでいると感じているみたいでした。その次の何回かのセッションは、彼の閉所恐怖症的不安に関連付けられます。前述しましたのは彼の11回目のセッションの簡単な描写なのですが、復活祭の休暇をそろそろ控えておりましたので、私は彼に2週間セッションがお休みになることを告げたわけです。彼は突っ立ったままで、外を眺めておりました。私がこれを彼に告げました時点で、彼は急に体の向きを変え、私を凝視しました。目を丸くして、その顔にはまるで信じられないといった表情 disbelief が浮かんでおりました。

翌日彼は一冊のノートを持参しました。最初のページいっぱい大きな絵が描かれており、まだ完全には描き終わっていないようでありました。そして、彼は坐ってそれに手を加えてゆきます。それは全体に一つの丸い円があり、そして周辺には4つの輪があり、それらは上手に小さく分割されておりました。その真上にはシャフト(心棒)があって、それは円の中央に沈み込んでいるようでした。最初の輪には空隙を残し、それからその下にはそれぞれ輪が列なったかたちになっています。私は彼に何の絵なのかと問います。いつもの彼の話す癖なのですが、ちょっとためらうようにして、<イギリスとフランスだよ。かつては一緒だったんだ。それから活火山がやってきて、それでその噴火のせいで、別々になったの。この真ん中にあるのは沈んだんだよ、ほらね、こんな具合に・・・>と言います。それから彼は鉛筆を使いながら、それら4つの輪のそれぞれが沈んで陥没した部分のせいで、どれもが不釣り合いになっていることを説明してみせます。私は<私たちあなたと私とはイギリスとフランスみたいで、かつては一緒だったということね。でもその‘一緒’というのも、私が復活祭の時期にセッションをお休みにしなくてはいけないって告げる迄だったのよね。その私の言葉はこの真ん中のシャフトみたいに、君の中に沈み込んだというわけね。それから、君は私のことをじっと見つめたでしょ。君が私を見つめていたとき、私のことをいなくなっちゃう悪いオッパイだって思ったのじゃないかしら。それから君の眼から火山が噴きだしたってわけね。それで悪いオッパイを視界から追っ払って、それを私の中へ投げ込んだみたいに思ったのね>と言います。【ここでの解釈では、‘悪い母親 bad mother’ではなく、‘悪いおっぱい bad breast’という言葉を使っております。私との関係性における性質上、早期の部分対象レベル early part-object level と理解されたからであります。】私は続けてこう語りました。<ほらね、私たちはこれで別々ということになったわね。まるっきりどうにもくっつき合わないわね。>ジョンは真ん中の円を黒く塗ります。彼は、<ほら、真ん中が火で燃えてるだろ。それって、他のところへ移らないようにだよ>と言います。彼はページを繰り、その紙の裏側に彼が描いたものが透けて見えはしないかどうかを確かめます。彼はここでオナラを始めます。私は、<君の描く絵って、君自身の内側を描いているわね。まるで私をオッパイとして内側に捕えてしまってる。それも君の噴火山と一緒にだわね。それで君の真ん中辺りが燃え上がってるってことになるわね。君はこうした火山の噴火ガスが他へ漏れてしまっただけでいいかと思ったみたい。だけど、結局のところ、君のお尻の穴からそのガスの臭いが漏れちゃったと思ったんだわね>と語ります。

ここで彼はノートの新しいページを開き、3人の顔を描きました。最初の顔は狭い額であり、2番目の額はちょっと広めの額で、3番目はそれよりもっと広い額になります。最初には「-1,000」と書き込み、2番目のには「現在Now」、3番目のには「+1,000」と書き足しました。〈彼らはただの人だよ〉と彼は言います。それで「-1,000」というのは‘千年前’ということの意味し、つまり当時は頭脳 brains がなかったのです。そして今現在は頭脳が増し、そしてあと1000年経てばもっと頭脳が増えてゆくとのことでもあります。彼の髪の毛は長めでしたから、実のところ額が狭くみえます。それで私は、〈これらの人というのは、ほんとは君のことだよ。今や君は自分の頭脳が大きくなったって思うのね。つまり君は解ったのよ。私を不在のオツパイと見做し、それに自分が何をしたのかってこと、さらにはそれで自分の中に今どのようなオツパイを持ってるのかってことが。それでそんなふうにしたということだよ。これって昨日とはまるで違う。そうしたことなぞ全然解らなかつたんだものね。君は不在のオツパイを木っ端微塵に吹き飛ばして、視界から弾き出してしまったんだもの。確かにこの活火山の噴火のような手段に頼るのは、理解すること understanding とは程遠いものね。それで、昨日はまるで1,000年昔って思えたんだわね。ずうっと昔、君が赤ちゃんだった頃、この火山噴火によって君がお母さんの不在のオツパイを取り除くのに使った手法がそれだったのね。‘昔昔って感覚’はそうした事実から来てるわけ。それで、今やもっと大きな頭脳を得られたという感覚は、おそらく君が未来においてもっと大きな頭脳を得られるといった希望をもたらしたみたいだよ〉と語ります。

彼はもう一枚絵を描きました。彼は円を描き、それは月だと言います。彼は、〈ロケットが月を目掛けて空気を入れた投げ矢を放つんだ。そうしたら、あそこは生きられるだけの空気が充分あることになるだろう。〉と言います。そこで私は語ります、〈君が不在のオツパイを爆発させて、視界から遠ざけたとき、君は君の眼から火山が噴出したように思えたんだね。それが我々の間に横たわる距離空間を横切り、ついには私に届き、そこで私の中に入り込む。すると、私は月のオツパイ (a moon breast) になるということになるわね。それで今や私にいのちを吹き込まなきゃって、それから私の生きてる場所にもだよ。そう思ったのね。そうすると君の方にしても十分な空気が得られるわけで、君のいのちも永らえられることになるわね。君は私に向けて自分が語る言葉でこうしたことが出来るって思ったのね。それって、分析にいのち life をもたらず空気の充たされたダーツって the darts of air ってことになるわね〉と語ります。彼はノートのページを繰り、裏側が透けてみえないかと確かめます。彼はちょっと困ったふうな面持ちで、そこに認められる鉛筆の跡マークに手を触れています。そしてこの間、ずうっと臭いオナラをし続けます。私は、〈どうやら君はオナラを気にしているみたいだね。それって、私を攻撃し、だから遠ざけてしまおうし、それに死んだオツパイやらその汚染された場所もせつかく甦らせたのに台無しにしてしまおうって。つまりオナラでそれらが穢されダメにされちゃうって案じたってわけね〉と語ります。

彼は小さな絵を一つ描きました。地球を、それから大きな月を描きます。彼はそこに4つのロケットを加えました。月は前回ほどには円くありません、でも地球に近いところにあります。彼は鬱々とした感じの声で、〈(ロケットは)今戻ろうとしてるところ going back なんだよ〉と言います。そこで私は、〈4つのロケットというのは、君が私に会いにくる日数を言ってるわね。それから復活祭を迎えるわね、それで君

はここには来れない、行かなくちゃって going back というわけね」と言います。彼は月に幾つかのふぞろいの形のものを描き加えます。彼は、<これって、夕方月を見上げるとこんなふうになってるんだよ>と言います。そこで私は彼に<月にある、これって何なの>と尋ねます。すると彼はしばらくためらっていた後に返答します。<今ようやく解ったんだけど、これって月面にある‘クレーター’って言うやつだね>と言います。そして彼は3つの頭の絵に戻り、3番目の頭をもっと大きめにします。彼はどうも居心地悪いふうで落ち着きません。それで私は、<これで解ったわね。私の中にクレーターを見たのね。それも昨日の‘眼-噴火山’、それに今日のオナラから出来たというわけだね。たぶん月を見上げるって話をしているとき、赤ちゃんの君がお母さんのオッパイを見上げてたときの記憶を言っている。そこで君は解ったのね。君が攻撃したんだって、そこにクレーター(爆弾穴)やらもしくは死火山を押し込んだって。それって実はそもそも君自身なのであって、もしそうでもしなければ君自身が死に絶えてしまうってことだものね。こうしたことを悟り、だから君は絶望を覚えたわけだね。何故ってクレーターみたいに穴だらけのオッパイなんて君を養えるわけないからね。実際、君は私と一緒にいて居心地が悪く思えたじゃない。それって、どうやら私が今や死んだ月・オッパイになっちゃって、臭いガスを放つってわけだからよね>と語ります。

彼は、最初の絵に戻ります。その中央に彼は<火事 fire>と書き記します。その上の陥没した箇所には彼は<水浸し Wet from Water>と書き加えます。そして、<海水が押し寄せてくるの>と説明します。そこで私は、<最初の絵に戻ったけど、それって君の内側だったわね。それって、なぜかという、私は外側のオッパイで、死んで臭くてひどいものになってるし、それに復活祭には遠くに行っちゃい、月みたいに届かないわけだからね。それで君は自分の内側の噴火山みたいなオッパイと一緒に君自身火達磨になってるってことを見せてくれてるわね。それから赤ちゃんの君は、私が去っちゃい、それで置き去りにされると、まるで涙やらオシッコが押し寄せてきて、グジャグジャに濡れて水浸しになっちゃって感じることもね・・・>と語ります。

このセッションの大半はさほど取り上げず、また解釈も致しておりません。セッションのお休みへの不安感とそれへの反応以外さほど意味があるとは思われなかったからです。私が彼にセッションの休みを告知した言葉は、彼の中へそのまま突撃したもようであります。それらは彼のからだのど真ん中を凹ませたみたいに感じられたのです。‘噴火山’がやってくるということは怒りの攻撃ではありません。見かけ上は確かにそうなのですが・・・彼は怒ってはいませんでした。彼の眼は大きく見開き、怒りで燃えているといったふうではなく、むしろ信じ難いといったショックを物語っていたのです。彼にとって、ただそれはあり得ないと思ったということになります。それから彼はかなりの間ただぼんやり虚ろに私の顔を見据え続けたということになります。こうした瞬間に起きた無意識的妄想というのは、この不在のオッパイを火山の噴火みたいに、なんとか彼の視界から吹き飛ばして消してしまいたいといったことでありましょう。

ごく幼い幼児がオッパイのいなくなる状況においてただ宙をジッと凝視しているさまが見掛けられます。どうやらジョンも心理的背景からしてそれと似た体験をしていたようであります。オッパイがいなくなってしまうとき、子どもはただじっと宙を凝視しているだけです。その不在をちっとも気に掛けていないの

だとわれわれは見做しがちであります。しかしながら、折々に子どもは不在のオッパイに反応しているようにわれわれには見受けられることがあるのです。すなわち、それは子どもにとっては餓死させるオッパイ a starvation breast なのです。それで、例えばジョンのように、私が彼を置き去りにしていなくなると聞いたときにセッションの中で彼がしたように、凝視しながらも視界の外にその不在のオッパイを弾き出してしまふのであります。死 death がジョンを凝視し、その目の中で把捉されたと言っていいでしょう。そして彼が振り返って私をジッと見詰めたとき、彼は敢えてそうすることで目の中の死のオッパイ death breast を弾き出し、私の中へとビュンと放り投げたといった空想をしたものと思われまふ。すなわち、彼は己れの死の不安感を避けようとして、こうした原初的な前思考様式の反応を使つたのであります。

己れの恐怖を‘噴火山’的手法でさっさと片付けてしまふのではなく、考えること、つまり自分の頭脳 brain を使うといったことがどれほど彼にとって難しいことかは、こうしたことで了解されましよう。このセッションでは滅多に自分の頭で考えるということは出来ておりません。そして思考の段階を徐々に追って進展してゆくというのはあまりにも遅々としていて、実に千年もの時間が掛かるように思われたのです。ここで興味深いことは、セッションの中で2回ほどジョンの頭脳がちょっと大きくなったように感じられる瞬間がありました。その1番目は、彼が自らの内側の世界 inner world について何ごとかの気づきがあった時です。つまり内界には噴火山的な対象が含まれており、それが彼を内側から燃え尽くさんとしているといったことでした。さらには同様に、彼が月を見上げたとき、彼が見ているのは彼自身のクレーターであると知り、対象に対して己れが為したことを覚った時であります。この2番目の気づきは、了解するのはちょっと難しいようでした。なぜなら、そこには迫害感 persecution があり、そしてまた絶望感もあつたからに相違ありません。何しろオッパイがクレーターのように穴ぼこだらけになつてると知りながら、それでも尚己れが生かされ続けるかどうか大いに怪しんだでしょうから。そして今や彼には以前よりもっと大きな頭脳があり、それだから余計に来るべき復活祭のお休みが緊張にならないわけではないのです。事実として、彼の用いたことばを使えば、1000年昔ならば、セッションのお休みが何を意味しているのやら、対象の不在に伴う緊張感に付け加え不安感の重圧なども彼にはさっぱりわけの解らぬものであつたのですが、分析を受けたお蔭でようやく今やそうしたことが解つたわけであります。不安感もたらす重圧にしても、治療前にはとても直面出来そうになつたのですが、それが今や一人で直面しなければならぬと彼にしてみれば大いに恐れるに至つたもようであります。実際のところ、セラピイの患者がそうした不安感をセッションのお休みの間に抱えきれないということがあり、それで治療が中断されるとか、もしくは愚かな行為、もしくは犯罪に走るということすら珍しいことではありません。

このセッションにおいて、彼の攻撃衝動はフルに動員され、不在のオッパイを排除せんとしていることがお分かりでしょう。彼自身がこんなふうには言つております、<噴火山がやって来たんだ>と。これは彼がオッパイに死滅の感情を投げ込んだだけでなく、彼のイメージを尚もフォローしますならば、そうした甚大な暴力でもって噴火山は上陸した途端、月を木々端微塵に吹っ飛ばしてしまふのです。これは重要なことからあります。その意味するところは、再び摂り込まれて内在化された不在のオッパイは、破壊の爪痕をその内側に今や巖然として残すものと感じられますから、その内側においてまつたくのところ

衰微し疲弊したオッパイになっているということでもあります。さらには、対象が不在な折の飢えの状況はそもそも、幼い子どもには餓死を意味します。この恐るべき死の脅かしこそ外側へと投射されるものであり、それがまた再び内在化される場所の対象の内に含まれてもいると感ぜられるわけでもあります。そうなりますと、内なる対象はその内側から朽ちて死滅するように感ぜられます。そこで今度は不在対象が投影 projection によって、死んだ対象 dead object になってしまうということになりましょう。ここでさらに申しますと、発達の未熟な段階では、いかような進歩であっても、もしそれが期待されるとしたら、それは外的な対象が傍らに居てくれることに大きく依拠します。従って、かなり継続された時間もしも外的対象が不在としたならば、子どもは恐怖と絶望感を募らせることになりましょう。ジョンがセッションの終わりに見せたように、己れ自身に背を向けます。心の内では内的対象が燃え尽きたと感じ、また一方では涙とオシッコで濡れネズミの状態になっているといった具合であります。

こうした事実、すなわち外的な対象が不在のために内的な状況が衰え活力が低下した場合には、子どもの発達において支障をきたすこととなります。内的対象 the internal object は生きたものとして永らわねばなりません。そうでなければ、再会した時点でかなり深刻な退行が起こり、持続的な関係性はもはや無理となるわけです。今や子どもにとって、オッパイが目の前にアルときに心しなくてはならない事 task とは、オッパイが不在のときとはまったく違ったものになります。オッパイがアルとき、子どもの気質そして環境の如何に関わらず、それらの困難性を克服し、良きもの the good を取り込まねばなりません。オッパイが不在な折は、それがアルときに得られた良きものを保持することでもあります。これに対応しておりますのは、治療において子どもがセラピストの不在の間、それがセラピイで培われた己れ自身についての洞察力をフルに活用し、それを堅持することでもあります。しかしながらしばしば、こうした気持ちが落ち込み萎えてしまうような状況では自分が一人ぼっちだということを知るわけです。不在な誰かを尚も必要とする苦痛は、その子を原初的心的機能へと引き戻すことになりましょう。それはジョンのケースにおいて例証されております。自分の状況に直面できず、自らの苦痛を感じそしてまた知るところの己れ自身をバツサリと片付けてしまうのです。そうした己れの部分を対象へと投げ込んでしまうのです。が、そうした暴力性ゆえに対象に損傷を負わせたと感じることにもなります。すなわち、子どもは投影同一視 projective identification をますます使うといった手法に訴えるようになります。その挙げ句に、以前よりもいっそう悪くなった対象を取り込むといった羽目に追いやられます。それは、今や子どもの暴力的な部分をもそれに内包されていると見做されるからであります。そして、もしもそこに外的な対象がいなかったら、子どもはいっそう気持ちの立ち直りを妨げられることになりましょう。

メラニー・クラインの論文《Mourning and its Relation to Manic Depressive States》の中で、彼女は子どものそうした内なる不安感を克服するには母親が外的に居てあげることがどんなに大事かということの詳細を述べています。それは母親がイナイ間に、子どもの糧やら、それに愛情もですが、それらが満たされないからということが問題であるだけでなく、彼女と一緒にアルことで子どもの心の安心を保証してあげられることが大事だからであります。母親が自分を見捨てたからと攻撃するときに、子どもはその損傷をきたした母親を内在化しております。ですから、もしも母親が外的に存在してくれ

ているとしたら、己れの内側に対しての‘反証 disproof’を子どもは視覚的に確認できるというわけがあります。そしてそうした外的対象を、内的対象をよりいっそう望ましいものへと好転させるために取り込むことが出来ましょう。不在対象を再び得たことの喜びは、幾分はこうしたことにあると思われる。実際に、対象から離れることにしつこく抵抗する子どもの場合には、おそらくその外的な存在によって保証 reassurance を得られず、むしろそうした内なる損傷をきたした対象と共に一人放置されることの恐怖を物語っているのではなかろうかと考えられます。

ここでもう一つ、対象がいなくなる時に子どもから奪われる対象の或る性質というものに注目したいと思います。それはすなわち、その子の望ましくない部分を受け止め、ケアしてくれる誰もいないということとあります。この母親の能力、子どもに対して与えられる【思い reverie】、そのようにW. R. Bionは名づけたわけですが、それは子どもが内に抱えるのを好まないものを彼から吸収し、より良い形で子どもへと戻してやるといったこととあります。それは愛を与えることと同じぐらいに情緒面で重要なことなでもあります。それは身体面で子どもに滋養を与えることが大事であると同じく尿とか便とかの排泄物を片付けてやることも大事だという意味にも似ておりますが…。もしも子どもに情緒面でその不要な、かんばしくない unwanted 部分を請け負う誰もいないとしたら、その子はそれをまったくそのままに抱えていなくてならないか、或いはそれらを外へと撒き散らし、それがために汚染された環境に生きねばならなくなるでしょう。子どもがかなり長期間対象との分離を強いられていると、ある意味で衰弱を超えた印象を呈するといったことがあります。つまりその衰弱が行き詰まって立ち往生している状態といえましょう。このことは内的状況から見て、滋養やら慰めを与えたり、その心の状態を受け入れることができるはずの外的対象がイナイといった不在状況が続くと外と内との間の交流が途絶え、子どもは自らの内なる状態にすっかり圧倒されてしまうことを意味いたします。

ここで子どもの心的苦痛に加え、さらには自己の悪い部分について外的なコントロールが不在であるということが挙げられましょう。殊に自我が脆弱でかつ破壊的な衝動が強い場合、そこには外的な抑制が必要となりましょう。そうした抑制する対象が不在である場合、子どもは、対象の不在によって喚起されたところの嫉妬やら羨望にとことん気が奪われ、まったくにっちもさっちも行かなくなるわけです。それというのも対象が不在なのは、それが他の何か、他の赤ん坊とか、もしくはペニスによって占められているせいでイナイとか、或いはまったく利己的に己れ自身の内側に気持ちが奪われているせいでイナイと見做される場合がしばしばあるからです。例えば、或る8歳の男の子はセッションのお休みが近づいた頃に、何度も次のような遊びをしました。彼はボウルを逆さまにして、その上に小さな赤いものを乳首としてくっつけ、オッパイにしたのです。彼はそのボウルの中に何台かの車を入れます。それから彼は野獣を持ってきて、このオッパイの象徴物を取り巻くようにしてその周囲に立たせます。そしてもう一台の車をそのオッパイの中にいる他の車の中へと突っ込んだのです。そしてめちゃめちゃに押し潰したのです。ここには、オッパイが自分の前からいなくなってる間他の誰かを内に抱え込んでいると感じられ、だからそうしたオッパイに子どもの原初的な心的部分が引き付けられ、そして空想において、その内へと侵入し、そこに居る誰彼に対して猛烈な攻撃を仕掛けるといったさまが如実に覗われます。

こうした内的対象への乱暴狼藉は、外的な対象が不在であるとき、子どもが対象を自らの内に保持しかつ活用せんとすることを困難にいたします。しかしながら、これらの困難性に関わらず、対象の不在は、子どもの発達にとって不可欠な条件といわねばなりません。ここで僅かながら臨床素材から例を挙げますと、不在対象はジョンが懐いていた「オッパイの中に生きている」といった空想を打ち砕いたのでしたし、それで彼は、2つのセラピイのセッションの間に、そのことで大いに刺戟され、彼はまだ描くところまでは行っていませんでしたが、予め私へのコミュニケーションを準備するかたちで、結局そうした己れの心的状況をノートに書き留め、その描いたものを分析の場に持参してきたということがありましたが、実にそういうことなのです。

さてここで、思考すること *thinking* そして対象が不在であること *not-presence* の関連性について改めて考えてみたいと思います。思考する能力 *the ability to think* とは、不在対象 *an absent object* を思うことから始まるという見解が提示されましたが、不在対象はその性質からして‘決定的’な選択肢を提供することになります。すなわちDr. ビオンの言葉を借りますと、＜フラストレーションを回避するか、もしくはそれを修正・緩和するかのいずれか＞ (*Learning from Experience*, p.29) といった選択肢であります。ジョンの‘噴火山’なる手法は、明らかに状況の回避を狙ったものであります。彼はそれにまともに対応しているとは言えません。これは何が起きたのかと彼が説明叙述するところのものに反映されております。＜噴火山がやって来た *a volcano came*＞と彼は述べておりますが、つまりのところそれは彼の中で勃発したところの或る出来ごとには過ぎません。彼自身が心的操作を敢えて援用したということではありません。しかしながら、こうした最初の初歩的な思考は、フラストレーションに直面し、それに対処せんとすべく子どもが心を働かすことを余儀なくさせるのであります。

最初の段階では子どもはまず万能感的な思考を使い、こうした状況を変容させんと試みるでしょう。そうすることで‘イナイ対象’に自分が依存している状況を完全に意識させられることから免除されるというわけです。その例としてここでお話しするのは、或る12歳の女の子です。彼女は夏休みを控えて或る準備を試みました。彼女はありとあらゆる必要なものを万能感的に自分の所有物とイメージしておりました。8月のカレンダーを作製し、そこに庭でのお茶会を描いた絵をイラストに添えました。その絵は大きくテーブルで占められておりましたが、そのテーブルの前方には2つの長めのグラスが置かれてあり、そこには丸いアイスクリームがいっぱい盛られておりました。彼女の連想から、私(つまり彼女の母親として見做されているわけですが)、そうした私から8月中に離れねばならないことをまったく否認にしているということがよく解りました。空想上、彼女はお茶会を仕切っており、すなわち、彼女自身が母親になり切って、その彼女の所有物をもちゃっかり自分のものにしてしまっているのです。とりわけアイスクリーム、それは母親のオッパイというわけであります。

このお休みの間、現実の状況すなわち私が一緒にイナイということが、こうした空想に侵入し、それを突き崩してしまったこととなります。そして、彼女はセッションに戻ってくる何日か前に夢を見、それを私にお休み明けの最初のセッションで語ってくれました。その夢の中でどうやら彼女は海水浴場の端っ

ここに立っていました。そこで彼女は海水浴をしたらどうかと勧められます。彼女が海を見ますと、それはとても冷たそうで、もう日も暮れかかっている薄暗く、どう見ても気をそそらないのでした。そこで彼女は止めることにしたわけです。ここで夢が別のシーンへと変わります。彼女は腰湯に入っていました。もう一人の女の子、学校友だちも一緒でした。彼女のお腹がずいぶん大きくて、妊娠しているのでした。すると、彼女のお腹のある箇所から大きなノブ(扉の取っ手)が突き出ており、それは赤ちゃんの頭に違いないと彼女は思います。彼女の連想からも、それにここでは対象が不在であると患者自身思っているわけですし、それに纏わる内容と見做されますから、この夢が全体的に意味づけられる位置からして、次のように理解されていいでしょう。すなわち、この後半部分では、彼女はまるで突如として妊娠している母親になっております。さらには両親というカップルにもなっております。すなわち彼女と彼女の学校友だちが一緒ですし、そしてまだ産まれていない赤ん坊もいるというわけですし、それから皆で一緒に腰湯に浸かっているというわけです。彼女は、万能感的な空想 omnipotent phantasy によって、彼女ではないところの総てになっております。つまり実際にそうであるところの己れ自身が覚える心的痛み pain をまったく否認しているわけです。これが夢の単なる一部分とすれば、これは、まさしく患者が万能感的に対象の不在を否認していることが例証されているといえましょう。しかしながら、夢の発端の部分をよく見ますならば、セッションの休み中に患者が自分の万能感について洞察を得、その目論むところのものを理解し始めていることが示されております。すなわち、彼女は海へ行くことを止めてしまっております。つまり、お茶会の空想から脱け出し、‘現実’という気のそそらない海へ踏み出すことの苦痛 pain を免れんとしているのです。そうして彼女は、セッションのお休みで治療が途切れたことで、彼女と一緒に支えてくれる対象がイナイことを認めざるを得ないことに至ったというわけです。夢の雰囲気は冷やかであり、すでに日は暮れ、薄暗いし、気がそそらないわけで、それで彼女はその場をさっさと引き上げ、その代わりにそのまま己れの万能感に頼ったということになります。彼女はまた、分析が、いかなれば、現実において湯浴みすることをむしろ‘助言している advising’ということを知っているのです。このセッションのお休みの間に彼女が見た夢は、万能感的思考が己れの気のそそらない現状に対するの防衛であると覚ったことにはなりますが、それでどうやらこの時以来彼女の万能感的な手法がぐんと減っていったように思われます。治療セッションの途切れは、不在対象について、万能感的にではなく、それとは対極に、現実的に思考することを促す刺激剤になっていたものと考えられます。

夢を見ながらも彼女の中でどのように不在の母親が思いめぐらされているかを見てみると、大変興味深いといえましょう。彼女は外へ出て海で泳いで来なさいと勧められていると感じています。気のそそらぬ、冷たい、薄暗い、そして独りぼっちの経験へと、だから気が進まないわけですが、そちらへ押しやられるといった感じているのは明白であります。こんなふうに無理強いする母親は悪いものというわけです。実際、そもそも不在対象とは、苦痛を覚えるニーズの状態で出会うわけですから、子どもと一緒に居てもくれない、まさに出し渋っている対象なのですから悪いものとして感じられるのです。子どもの対象に向けるごく自然な貪欲さからして、その不在に対してはなおさら憤るのも無理ないわけで、それは対象が自分以外の誰かと関係性を持つことを阻もうとする嫉妬心についても同様であります。既に述べましたように、子どもが対象にいつも側にいてくれるよう執拗に求めることは、絶えず大丈夫だと

保証してもらいたがるといったことですが、それには不健全なものがあるといえましょう。また、こうした不健全なカテゴリーに挙げられるのが、子どもがしょっちゅう慢性的な喪失感に悩まされており、そこで対象の存在を絶えず希求しているといった場合です。例えば、ある幼い男の子は始終何ものかを紛失しているといった子どもでしたが、それもマッチ棒の先といった瑣末なものでも彼は躍起になって探さねばならないのです。これと並行して、両親から引き離されることの強い不安感が彼にはありました。こうした例では、外的な対象とは R. E. Money-Kyrleの言うところの‘必要な付属物 necessary adjuncts’ というわけでありまして、それをその子どもが執拗に必要としなくてはならないのは、彼自身の喪われた部分をそれらが隠し持っているに違いないと感じているせいなのです。

こうしたことは、どうしたら不在対象が悪い対象であることを止めることができるのかという論議になりましょう。本当のところは実に複雑極まりない遅々とした歩みであるものをごく簡潔に描写するしかないのですが、それは次のようになるかと考えられます。子どもを対象へのしがみつきへと駆り立てるものとは、生来の欲求でもあり、また健全な必要性からでもあり、またたとえ何らかの支障をきたしている発達上どうしても過剰になりがちな要求といった、それらすべてがそうだともいえませんが、またそれとも違って、子どもには対象の不在へのニーズというものがあるのです。不在は関係性の自然かつ根本的 essential な条件なのです。もしそれが無いとしたら、子どもそして対象は共生的となり、それらいずれのアイデンティティーにとっても有害といわざるを得ません。対象から距離を取る時間は、対象と一緒に経験とともに、情緒的に釣り合いのとれたスタンスを得るためには必要であります。それで対象の良さが解り、感謝の念すらも、その不在がゆえにいっそう深まるということもあるのです。実際、対象が絶えず存在しているとしたり、むしろ迫害的 persecuting でありましょう。子どもは対象が自分のアイデンティティーに割り込んでくると感じ、対象を自分が独り占めにすることに罪悪感を覚え、悩まされることになりましょう。

子どもは、不承不承、結局のところ、不在対象に我慢するようになるということ決してありません。むしろ対象が不在であることを必要としているのです。子ども自身の情緒的な成長は、対象にしがみつこうとする内的傾向に逆らうものであります。主として、子どもがその対象にそれ自身の自由を与えるのは、対象が彼自身の付属品といったことではなくて、それ自身の権利を有するものであるという思い遣り concern でありましょう。子どもは常に、ある部分において、親離れ weaned を求めているものなのです。さらには、子どもが成長するにつれ、罪悪感にもより耐えられるようになり、悪い不在対象へのニーズも減ってまいります。そして対象が目の前にイナイにしても、その良い性質を失わず、子どもの中で持ち堪えられてゆくのであります。それから、たとえ対象が不在であっても、情け深くやさしいものと感じられるとしたら、それは必要なときは戻ってきてくれると信じられているからでありましょう。言い換えれば、不在対象をめぐる歴史とはこんな具合かと思われれます。まず最初には、悪いオツパイがアルということ、2番目にはオツパイの悪い側面が思われることになりまます。そして3番目には、良きオツパイが失われているといったことに考えが及ぶことになりまます。

この3番目の段階で、対象の不在というものが分別をわきまえて把握され、実際それがイナイ間ですらもむしろ望ましいと感じられます。対象は休息を与えられ、子どもが己れ自身の生を生きんとするように対象もまた自らの関心の赴くまま生きることが許されるわけなのです。ここで貪欲、嫉妬、そして羨望は減ってゆき、愛が、その対象を己れの攻撃から護らんとして庇う傾向が募ってまいりましょう。このことは、子どもが改めて取り込んだ対象が意気沮喪したものではなく、生き生きとして、外的には不在だとしても子どもを内側から支えてくれているということを意味しております。セラピイの治療では、そうした自己了解を子ども自身が活かせるようになったとき、この段階に達したものと考えられます。

※ 《参考文献目録》:

- ・Freud, S. (1900-1). The Interpretation of Dreams, II.
Standard Edition 5. London, Hogarth Press.
- ・Bion, W.R. (1962). Learning from Experience. London: Heinemann.
- ・Klein, M. (1942). Mourning and its Relation to Manic-Depressive States.
In Contributions to Psycho-Analysis. London. Hogarth
- ・Money-Kyrle, R.E. (1961). Man's Picture of his World. London: Duckworth.

※ 《原典》:

《The Absent Object》 by Edna O' Shaughnessy
【Journal of Child Psychotherapy】 1964, Vol. 1, No. 2

【訳者あとがき】 ～経験のバトン・リレーを願って、あなたへ～

山上 千鶴子

これは私にとってなかなか因縁深い論文なのである。前回Kate Barrowsの症例論文「生のつまずき」を訳したのだが、参考文献リストの最後にこのMrs. E. O' Shaughnessyの論文の記載があった。この論文に彼女も大いに感化された時期があったものと認められ、ある意味懐かしかった。振り返れば、あの時代、つまりは1960年代後半以降1970年代の私たち【タヴィストック】の訓練生らは、こうした‘先輩’たちに先導されていたのだ。Kate Barrowsも私も紛れもなくその‘伝統’を引き継いでいる。私たちはこのような‘共通認識’からスタートしているわけだ。そこで私は、彼女に背中を押されるようにこの論文の翻訳を試みた。

【タヴィ】に在籍中、私はこの論文を読んで大いに啓蒙された。恰も子どものセラピイの‘見取り図’

の全容が解明されたかのような印象があった。セラピーというものがすぐれて概括され、論旨は一貫し、整合性が貫徹されている。なるほどそうかそうかと感じ入った。それで1978年、私が7歳のハンナという女の子のセラピーを開始するにあたり、3番目の研修症例は【タヴィストック】の外でスーパーヴァイザーを探さねばならないという決まりであったから、迷う事なく彼女を指名した。嬉しい出会いになるはずであった。ところが、実際にスーパーヴィジョンに通い始め、その感触に違和感を覚え、2、3ヶ月もしないうちに頓挫した。私は当時既に【タヴィストック】ではマーサ・ハリスをはじめとする教官たちに、セント・ジョージ病院ではジョン・ブレンナーから、さらにはDr. メルツァーからもプライベート・スーパーヴィジョンを受けていたわけだから、そこそこスーパーヴァイジイとして慣れはあったといていい。だが、どうも変なのだ。彼女は私が提出する資料を読みながらその字面を追う。そして時折のコメントがあるだけで、ハンナに対しての関心がこちらにぐいぐい伝わってくることは毛頭ない。そして何か私から引き出されることもない。つまり彼女の関心に応えようとして私の中に生まれてくるものがないのだ。分かるとか分かれるといった‘分かち合い’の感覚は失われている。ハンナが彼女のうちに喜んで迎え入れられているふうにも思えなかった。これは寂しかった。さらに言えばこの‘私’も同じくであって、彼女に知られようとされてはいない。そこに喜びの時間はなかった。私の心がまるで動かないのだから…。何か彼女から私に‘手渡された’という感触を持ってないままにセッションが重なってゆく。私は毎回スーパーヴィジョンの後、当然ながら、ハンナを抱えるセラピーの現場に戻ってゆかねばならないわけだが、でもこの‘動けない・動かない’といった自分を持って余した。戸惑いながら、その味気なさには心底参った。スーパーヴァイザーの変更を決意した。そして何の悶着もなしにすんなりと彼女とのご縁は切れた。それで結局のところ、ハンナの症例はDr.メルツァーに抱えられたのだから、それはそれで良かったともいえるが…。

Dr. メルツァーに直接そうした事の次第を詳らかに語った覚えはない。だが、おそらくどこからか噂を耳にしたんだろう。メルツァーが或る日、さりげなしに私にこんなことを語った。＜精神分析家の中でも、譬えていうならば、纏れた糸を一つずつ解きほぐすように謎解きをすることを分析と心得ている人達がいる。片やその一方では、草花を育てるように、光を当てたり、水を遣ったり、枯れた葉やら花びらを摘み取ってやったり、時としては肥料をあげたりしながら育ててゆく。それを分析と心得る人達がいる。自分は後者だ・・＞と。だが、私にしてみれば、彼らにとって‘自明の理’であることがとんと自分には掌握されていないことがただ解っただけで、己れの未熟さが思い知らされ、痛かった。自分が何を選ばなかった(選べなかった)のかが気掛かりだった。だから劣等感に悩んだというほどに当時の私はナウイーヴではなかったが、思い悩んだ。さらには、困ったことに自分がひとまず選んだ(選ばれた)ということにも懷疑が付き纏うこととなり、私を庇護くださっていた、恩義ある、身近な周囲の誰彼に対してもついでした懷疑の眼差しを向けざるを得ないことになった。結局ひとまずは棚上げということにしたが、帰国後も、私はこの懷疑というつまづきを引きずっていた。

そしてそれから40年近い時を経て、このMrs. O' Shaughnessyの論文の翻訳をここに試みたことで、それらに少し光があたったように思われる。『精神分析』において＜解釈 interpretation＞という言葉はしょっちゅう耳にする。セッションの中でわれわれが為すべきことはつまりはそれでしかないのだが。

「解釈とは何か」という講義を聴いた覚えもないし、「解釈」とはどういう心の手続きを意味するかについてもまともに教えられた記憶がない。つまりはその背景となる哲学も技術論も…。それに、歴史上‘解釈’にもいろいろなスタンスの違いがあるということも…。無謀だった。その歴史的背景を改めて見直さねばならないと思い、ディルタイ(1833-1911)に遡ってみることにした。《解釈学の成立》(1900)を読んでいる。そしていつか《精神分析における‘解釈’論》を纏めてみたいとも考えている。だが、ここで、それ以前に一つ問題と思われることがある。

あの当時から【タヴィ】の誰も彼もがピオンの言葉を金科玉条にする傾きはあったが、この論文の中で彼女が引用するところの「Learning from Experience」の中のピオンの叙述には引かかる。彼女はそれを彼女のセラピー論の根拠としているのだが。《思考 thought》と《不在 absent》とを関連づけ、後者が前者の前提条件として必須であることを挙げているのは論旨としては実に見事で手際がいい。反駁のしようがない。だが、それを読みながら、何かしら傷(いた)みを覚えた。そういえばと或る事が連想されたからだが…。ピオンは最初の妻を娘の出産後に喪っている。そして彼の回想の中の或る箇所にこんなことが書かれてあった。或る日のこと、彼の幼い娘、その母親を誕生時に奪われた哀れな子どもは、庭の芝生で這い這いしながら一人遊んでいた。傍らには椅子に坐り、その彼女を眺める父親の姿があった。そこでその子はぐずぐずと泣き始め、抱っこを求めて父親の方へと手を伸ばした。そこで状況を察し、逸早く乳母が駆け寄り子どもを抱き上げようとする。だが、ピオンは彼女を押しとどめ、<手を出してはならない>と阻んだのだ。当然子どもは火の付いたような叫びを上げる。彼はただそれを黙って眺めていたのだという。これは‘罪’だと私は思う。惜しいことに、‘手のない人’といった印象はピオンについては最初からある。Mrs. O’ Shaughnessy についても同様である。彼らに‘異質’なものを覚えずにはいられない。ここで私は「心の握力」というものを問題にしているわけだが…。

そこで思い浮かんだのは、昔から我々日本人にある赤子に添い寝する習慣である。どちらかという家族揃って‘川の字’になって眠るといったことなぞも珍しくない。それを彼らには聞かせられまい。家族がごちゃごちゃ混じり合っているなどは‘下等’とか‘未開’と見做され、忌避される。そのぬくもりは耐え難い、むしろ脅かしとなる。彼らにはそれが皮膚感覚で耐えられないのである。心身共にそこには‘見えないバリアー・障壁’が立ちただかる。彼らは「個我」に執着する。孤独というのもその代償として当然ながら甘受する。その殻の硬さこそが彼らの真骨頂なのだ。それが人間として‘高等’なのだという意識は揺るがない。この論文の《子どもの成長には対象不在が必須条件である》という主張の背景がこれである。ピオンは英帝国の植民地インドで生まれ育った。そしてMrs. O’ Shaughnessyは南アフリカ出身と聞いている。どちらもが超差別社会であり、しかもご自身は‘抑圧階層’に属していた。おそらく‘白人優位主義者’といってもよからう。私は彼女といっしょに居ながら、‘場違い’なところにいると感じさせられた。私のような有色人種は、彼女の心の中の‘アパルトヘイト隔離政策’においては黒人に等しい、‘見えないもの invisible’にさせられたわけなのかしら。己れの属する身分とは違う立場の人、殊に被抑圧階層に対しての緊張感・居心地の悪さは隠しようもない。私は present[アル]のに彼女にとっては absent[イナイ・不在]にされている。それが無意識裡の感覚麻痺ゆえだとしたら、

目の前に私が absent(イナイ・不在)として、それで私を(無論ハンナについても同様)彼女が心の内で抱えてくれる・考えてくれてるなど期待しようがないではないか。この皮肉さにはちょっと笑うしかない。この論文の整合性に危うい‘断裂’を見たような気がする。矛盾が内包されている。そもそも[思考 thinking/thoughts]とは何か? かくも思考力・知性にこだわるのが延いては人種差別・民族差別にも繋がりはないか。どうやら【精神分析】は‘主知主義・理性主義’に傾く嫌いがある。そうだとすると、それが己れの‘優越性’を証明する道具になると思うなどとても勘違いなのだ、と私は思う。

この論文の中の論旨、そして患者への解釈から覗くに、彼女の頭脳明晰さは疑いようがない。実に文句なしにカッコイイ brilliant のだ。傑出している。だがちょっと息が詰まる。何故だろう。ふと以前には思いつかなかった或ることが一つ引っ掛かった。症例【ジョン】の臨床素材の中の作画であるが、彼女が Mrs.O’ Shaughnessy の解釈を撮り込み、己れの内的現実を理解を得た時点で彼の頭 brains が大きくなるといった箇所である。紛れもなく彼女の興奮が伝わってくる。頭のいい子が大好きだというのはいいが、ついでにく私って凄い! 精神分析って凄い! >といった自画自賛も覗われはしないか。私はすんなり喜べない。むしろどうにも気色悪いといった印象である。まるで患者とは彼女の《brain-child(‘頭脳’が産み出した子ども)》というわけなのか。それが悪いとも言い切れないが。。

ふと、この論文を読みながら、Mrs. E. Bickがどんなに狂喜されただろうかと思った。さぞご満悦だったに違いない。この論文の背景として、Mrs.O’ Shaughnessy がMrs. Bickの影響下にあった頃に書かれたものであることが指摘される。彼女はMrs. Bickの優秀なお弟子さんであり、いうなれば、彼女の‘秘蔵っ子’であり、そして疑いもなしに彼女の《brain-child》なんだろうという気がする。そしてこの論文もまた、Mrs. Bickの‘作品’、つまりは《brain-child》に違いなからう。私の【タヴィ】で同期だったマリアがMrs. Bick から研修症例のスーパーヴィジョンを受けていた。彼女は私にこっそり打ち明けた。<あのね、セラピイのセッションの最中にも、Mrs. Bickがね、私の肩に居座って、ジッと(私の一挙一動を)睨んでいるのよ。。>と。彼女の顔は緊張して青褪めていた。<まあ、お気の毒。。>と私は言った。内心<そんなのバカみたいじゃないの>って思ったが、それをマリアには言えなかった。当時Mrs. Bickは‘ドラゴン’と噂され、畏怖されていた。【タヴィ】の研修生への影響力は絶大であったのだから。。確かに彼女にはかつてオーストリアでシャーロット・ビューラーに鍛えられ、記述された文章(日誌とか観察資料)の読解能力には抜群に秀でたものがあつたのは間違いない。私の【タヴィ】の先輩であるミリアナはMrs. Bickの<乳児観察>のグループに参加していた。そして私に語ったことがある。<彼女、もの凄いのよ。提出された観察資料の最初の何行かで一時間が終わるの! 彼女はそれについて延々と喋るわけ。まあ、それで、(彼女を)ただ黙って聞いていれば、それなりに得るものはあるわけだけど。。>ということだった。異議を挟むなど、とんでもないというわけだ。私はそれが気に入らなかった。セラピイだろうとスーパーヴィジョンだろうと、誰かが誰かに対して専制的だったり威圧的であるなどまったく不要なことだろうと思うから。。一つはっきりしていることはMrs. Bickがどうやら‘prize-winner’だということ。すなわち‘勲章 prize’になるような人を周りに集めてる。頭脳明晰で気概にも溢れ、また野心的でもあり。。そういう人たちが彼女の膝下から輩出した事実は否めない。

Mrs.O' Shaughnessy は勿論その一人であり、彼女のお気に入りの筆頭かも知れない。ここで何が問題なんだろう？ 私の同期にノエルというアイルランド系の男性がいた。彼はPersonal Analysisを開始するにあたり、マーサ・ハリスから告げられて、ひとまずMrs. Bickの面接を受けに行った。そして彼から聞くところによると、面接後に彼女から断りの手紙が届いて、その末尾にご丁寧にもnothing personal だからと付け加えてあったんだとか。私は彼に返す言葉を失った。内心憤った。＜あなたを分析にお引き受けできないのは何も私の個人的感情のゆえではありませんので、悪しからず＞といったことをしゃあしゃあ言える‘鉄面皮’ともいえる気取りが憎いではないか。‘nothing personal’どころではない。万事総てがパーソナルpersonalでない筈はなかろう。ノエルは、当時【Deprived Family Centre】で体を張って日々子どもらのケアに当たっていた。真に野心のない、心優しき人なのだ。そうした彼を、彼女は自分にとって‘勲章’にはならないと見たんだろうなということは直感的に察せられた。ノエルはその後Dr. Money-Kyrleとのご縁を得たのだから、むしろラッキーだったと思うけれど・・・。

さて、Mrs. Bickのいうところの‘nothing personal’ということだが、ここでそれを敢えて問題にしたいのは、どうも Mrs.O' Shaughnessy のこの論文の全体の雰囲気に通じてはいないかと思うからだ。心理臨床において、クライアントに対し ‘パーソナルpersonal’ であることが拒絶されているとしたら、実につまらない。寂しい。すなわち私はそれを、‘人格的・個人的な交わり’ という意味合いで使っているのだが、ここでKate Barrowsの論文と比べてみてもいい。違いは歴然としている。また、この論文で一つ目立った点は、Mrs.O' Shaughnessy が厳密に転移解釈に絞り込んで、一人ひとりのセラピイ患者の外的な背景には一切触れていないことが挙げられる。こうしたセラピストのスタンスは或る時期のクライン派には顕著である。‘今・ここ now&here’ に焦点付けての解釈は、患者を(過去も未来も含めて)「生きている」という観点から理解しようとするなら、どうもバランスを欠いているように思われる。ここで問題として挙げられるのは、主観を徹底排除することでひたすら転移対象という‘隠れ蓑’の中に逃げ込み、セラピストが‘nothing personal (impersonal)’ になりはしないかということである。「すべからず転移と取るべし、断じて個人的感情を交えない」といった徹底した姿勢は、セラピスト側の‘depersonalization (非個性化)’ に繋がるように懸念される。それはまずかろう。

Couter-transference (逆転移) の活用ということにしても、分析家の間で賛否両論、侃々諤々論議が沸騰した。それは遠い昔ではない。そして今やピオンの提唱する【reverie (もの思う母親)】というのが流行りだが、それに誰も異議を唱えているようには見受けられない。が、彼らにはそれがどういふことかほんとうのところ解っていないのではないかという懸念がある。ピオンにしたって、まさにそれこそが彼自身の幼児期、その母親に欠如しており、その痛みを媒介としての【reverie】の提唱なのだから。つまりは彼という固有の生の‘無いものねだり’ に起因している。この‘ナイ’ものが臨床上必須だということ、それを‘アル’ものにするためにわれわれ臨床家は大いに苦慮することが求められている。ここにピオンの仕掛けがある。‘願掛け’といってもよかろう。どうやら私たち皆、彼に付き合わされている。喜んで付き合わされるのがよかろう。或る意味どうやら日本人には‘勝ち’があるように私には思われる。彼らにナイものが私たちにはアルのかも知れない。それも気付かずに・・・探してみようではないか。

つい最近私は、発達心理学者の麻生武氏がわが子の成長の観察記録を纏めた著作を幾つか読んだ。その一つ、『子どもと夢』(1996・岩波書店)の中にこんな記述の箇所があった。(P.124)

●夢事例46

Yが3歳10ヶ月1日のことです。朝の5時頃、母親の横に寝ているYが急にワーンと泣き出します。母親が「どうしたん、どうしたん、Y君」と泣き続けるYを少し揺るように声を掛けると、Yは目を覚ましたのか、自分から「夢ノ中デオ母サンガ、ジュースクレルツェ言ツタノニ、ヨー君ニジュースクレナカッタ」と泣き声で訴えます。そこで、母親が「ごめんね、ごめんね、Y君」とひたすらあやまっていると、Yは心が収まり再び眠ります。

私の心はほっこりした。なんだかちょっぴり愚かしいような家族風景でおかしくもあつたりする。だが、何故かほんわかする。そして心底感動した。こうしたことはイギリスでは絶対あり得ない！因みに彼地の精神分析家というのは、絶対<I am sorry(ごめんなさい)！>など言わない。決然として任務(つまりは‘解釈’)を遂行するって印象でしかない。私自身も又おそらくかつてはそうだったろう。しかしながら、Kate Barrowsの臨床論文(※私の翻訳:「生のつまづき」参照)にはその行間から<ごめんね、ごめんね>が漏れ聞えてくる。そうした彼女の‘カッコ悪さ’が案外好ましい。稀有な資質ともいえる。子ども患者らの身になれば、まったく救われた気になる。Y君にも似て…。<ごめんね、ごめんね>ってお母さんに言ってもらって、彼の心がほんとに収まったろうなあってしみじみ解る。そして、もしかしてピオンの‘無いものねだり’の【reverie】とは実にこういうことではなかったのかと気づかされた。彼の母親ならば、おそらくこう言っただろう。<あんた又、ナニこちゃごちゃわけの分からんことを言ってるの。いい加減にしなさい！>って。(もしも彼女が彼の傍らにいたならばの話だが…)要は、この「ごちゃごちゃ言う」のがピオンの真骨頂であり値打ちだということ。そして【精神分析】についてもしかり(!)。

明治の文豪「夏目漱石」は、英国滞在の2年余について、その思いを‘不愉快’のひと言で括った。私の場合、不愉快と言い切るにはあまりにも彼の地の人々の恩義を得たからそれを口にするのは憚れる。だが実際のところ、どんなにどうだとしても‘収まりの悪いもの’が心底残るのは否めない。そして今私は、猪城博之著『ヨーロッパ・秋の旅』(1983/ヨルダン社)を読み耽っている。どっちがどっちと今も尚、妙に心の屈託を抱える私にとって、この方が「導きの星」になってくれるように思う。

猪城博之(いき・ひろゆき)氏は、哲学者でありクリスチャンでもある。私はこの方が痛く気に入っている。悠揚迫らず、訥々とした、その滋味豊かな語り口からほとぼしるヨーロッパ的知性やら教養やらが実にこなれており、耳に心地いいのだ。この方が九州大学在任中の1976年の秋、研究休暇を得てヨーロッパに2ヶ月間ほどお出掛けになった折のことをあれこれ随筆として書かれ、纏められたのがこの一冊の本である。その《序 旅から帰って》に下記のような文章を目にして胸を打たれた。

……僅か二ヶ月の旅だし、いわば三十年近く考えてきたことを検証するために、見に行くだけだから、始めから自分の見たいものは限られていて、それ以外のものは見る余裕もなく、見る気もなく、自分が

今さら新しい問題を背負いこむことなど有り得ないと思っていた。ところが、いざ行って帰ってみると、異質の文化にふれることの衝撃は予想以上に深く、何だか大きな問題を背負いこんできたようで、少し弱らざるを得ない。今まで考えてきたことがやはり甘かったということなのかも知れないが、行く前と帰ったあとでは心身の調子が狂ったようで、人に対してというより自分に対して少し不機嫌になっているようである。異質のものに気付き、異質のものを意識することは、人を不機嫌にさせるのではなかろうか。……

私はなんだか心がほっこりとして、思わずニコッと笑った。この方のこうした、ちょっとカッコ悪い正直な物言いが嬉しいではないか！この‘不機嫌’は実によく分かる。つまりは簡単なこと、あちらには往々にして<ごめんね、ごめんね>がないということに尽きる。その都度彼の心は収まらず、躓いたのだと…。笑えない！この‘不機嫌’とは言い換えれば‘消化不良’である。どうにも心にじっくり収まらない、こなれないというわけだ。そこで猪城氏は、6年に亘り、旅の記録を連載エッセイとして書き綴ってゆく。

さらに、《序》の文章は下記に続く。

……異質の文化の中に身を置くことは、ちょうどもう一度幼年期に帰るようなものであろう。幼い子が見るもの聞くものすべてに、これは何かと尋ねるように、新しいものに接すれば、これは何かと土地の人に尋ねるほかない。或る土地に根づいて、それなりに成長し成熟している樹を、別の土地に移せば、その土地になじみ、根づくまで、或る期間は成長がとまらないわけにはいかない。それと同じく、異質の文化の中に身を移せば、人間としての未成熟ということが当然起こるのではなかろうか。その反面、今までの生き方を反省するという効果をもつことは肯定できるとしても、人間としての未成熟という問題の方が大きいように思う。……私としては、この日本の近代を今までとは少し違った風に、見る眼が開かれてきたというのが、こんどの旅の一番大きな収穫だったのかも知れないと思っている。……こんどヨーロッパ近代或いは現代の文物に少しふれて帰ってきてからは、日本の近代の中にある善いもの、すぐれたものをもっと積極的に評価し直すことの重要性を感じるようになった。そういうことをしなければ、現在の日本の文化に対して、責任をとることにならないように思う。……

この文章を【精神分析】の日本への‘移植’という文脈で読み替えてもいい。確かにそうだ。‘成熟’こそが問題だ。今尚もそれが‘外来文化・輸入文化’であるのを忘れがちである。根づいているとも言えないのに…。そして現在も此の地でそれに魅了され、憧れて集う者たちがいるとしたら、一人ひとり自分の中の‘欠如’を見据えることであろう。つまり‘無いものねだり’を大いにすべしということになる。それを徹底させずには、精神分析ないしは心理療法は日本の地には根づかず、空疎なまま廃れてゆくに違いない。単に【精神分析】の簡便な‘日本化 Japanize’を目指すことではない。‘欠如’がどう乗り越えられたかということであり、そのためにこそ彼の地を先達と仰ぐことにもなろう。そうはいっても、煎じ詰めれば《‘親なるもの’の探究》である。それに尽きる。だからあちらでもこちらでもない。むしろ日本人の感性の中に誇れる何かがあるのだから、われわれがこの【精神分析】という収まりの悪いもの、片付かないものに留まって、その歴史的伝統を担うことの意味がなくもなかりやう。(2014/04/10 記)